51

GHQ文書による占領期のハンセン病関係資料の研究（第二報：沖縄と大韓民国について）

杉田　聡[1]・丸井英二[2]
[1]大分大学医学部看護学科
[2]順天堂大学医学部

国立国会図書館憲政資料室に所蔵されているGHQ文書（マイクロフィッシュ）の中に存在するハンセン病関係史料のうち、沖縄と大韓民国地域の文書"Leprosy-Ryukyu"（PHW03088—03089），"Leprosy-Korea"（PHW03078—03081）を選出し、その研究を行った。

現在までに、マイクロフィッシュからコピーとして文書を焼き付け、その文書を電子ファイル化する作業を完了した。

Leprosy-Ryukyuでは、全史料が英文で計九十二枚（記録用覚書五枚、書簡：十枚、Leprosy Briefの記事：三十六枚、その他の文書：三十九枚）で、夾雑物が二枚であった。

Leprosy-Koreaでは全史料が英文で計二百八十二枚（記録用覚書：八枚、書簡：四枚、英語論文：四十九枚、レオナード・ウッド財団の機関紙であるLeprosy Briefの記事：八十四枚、その他の文書：百三十七枚）で、夾雑物等が六枚あった。

"Leprosy-Ryukyu"の史料はすべての文書が一九五二年以降のものであり、主に沖縄・奄美地方の療養所に収容されている（占領前は日本国籍である）ハンセン病患者の本土移送に文書が費やされている。

"Leprosy-Korea"の史料はすべて一九五〇年以降のものである。この時代を概観すると、韓国併合からポツダム宣言までの間、朝鮮半島は大日本帝国の一部となっていたが、終戦後は南側がアメリカ合衆国、北側がソビエト連邦の支配下におかれた。その間、朝鮮半島の南側は米軍の直接軍政で統治され、GHQ/PHWが直接管轄する地区ではなかった。一九四八年の大韓民国成立後、一九五〇年に朝鮮戦争が開始されると連合軍

総司令官のマッカーサー元帥が国連軍最高司令官に任命され、GHQ/PHWも大韓民国の療養所の実態の把握などに努めているが、この時代のGHQ/PHWと主力部隊である第八軍（The 8th Army）との間の協力関係はいまだ調査中である。

本史料で確認できたことは、以下の点に集約できる。

沖縄に関する史料

一、一九五二年の沖縄におけるハンセン病患者の実態とレオナードウッド財団の活動について。

二、沖縄のハンセン病療養所（愛楽園）の患者からの日本本土への引き上げに関する嘆願書について。

三、一九五三年における沖縄在住のハンセン病患者の日本本土の移送、及び入国について。

四、一九五三年春に日本本土より医学生のハンセン病療養所での研修に関するやり取り。

大韓民国に関する史料

一、一九五二年における大韓民国におけるハンセン病患者やハンセン病療養所の実態とその歴史的経緯について。

二、大韓民国におけるプロミン治療の実態について。

三、一九五一年におけるソロクト療養所への実態調査と同療養所の歴史的経緯について。

四、ハンセン病患者の犯罪率に関する報告書。

沖縄や大韓民国におけるハンセン病対策は、概ね終戦前の大日本帝国政府が取った方針の継続となっていたことが現在までの分析で明らかとなった。発表においては占領軍総司令部公衆衛生福祉部がどのような関与を行ったかを明らかにする予定である。